

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13292

研究課題名(和文) 幼児期の感情理解における「わからない」反応の発達：自己感情理解プロセスとの関連

研究課題名(英文) The development of the "I don't know" response in early childhood emotion understanding: Relationship to the process of self-emotion understanding.

研究代表者

近藤 龍彰 (KONDO, Tatsuaki)

富山大学・学術研究部教育学系・講師

研究者番号：50780970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大きく2つの研究成果を見いだした。

(1) 幼児期(3～6歳)の子どもが示す「わからない(DK)」反応の実態およびその年齢的变化の背後にある認知メカニズムについて明らかにした。特に、DK反応は年齢が上がるにつれて低下すること、その背後に「推測の自覚化」メカニズムがあることが示唆された。

(2) 成人期(おおよそ20歳ごろ)の自己と他者の感情推測におけるDK反応の頻度とその背後にある主観的意味の違いについて明らかにした。自己と他者を認識的に区別できるからこそ「他者感情はわからない」という反応が生じること、自己におけるDK反応と他者におけるDK反応ではその意味が異なることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、(1) 幼児期において認知メカニズムが発達するからこそ「わからない」反応をしなくなるというプロセスが存在している可能性があること、(2) 「他者のことはわからない」ことは高次の認知プロセスが介在している可能性があること、を示唆している点に学術的意義を見いだせる。(1)に関しては、ある行動の生起頻度の低下に発達的变化を見いだすという認知発達領域でのインパクトが、(2)に関しては、他者感情を「わかる」ことを軸に検討されてきた「共感」や「心の理解」研究領域でのインパクトが、それぞれ見出せると言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, we found two major findings.

(1) We clarified the reality of the "I don't know (DK)" response exhibited by young children (3-6 years old) and the cognitive mechanisms behind these age-related changes. In particular, it was suggested that the DK response declines with increasing age and that the "guessing" mechanism is behind this decline.

(2) We clarified differences in the frequency of the DK responses and their underlying subjective meanings in the emotional inference of self and others in adulthood (roughly around age 20). It was suggested that the response "I don't know other people's feelings" arises because of the cognitive distinction between self and others, and that the meaning of the DK response in self is different from that of the DK response in others.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児期 「わからない」反応 感情理解 自己 他者

## 1. 研究開始当初の背景

「子どもは自分や他者の感情をいつ、どのように理解していくのか」を明らかにすることは、子どもと関わる実践現場においても、人間の起源を探る哲学的な分野においても、重要なテーマである。発達心理学および教育心理学においては、特に幼児期(3歳~6歳)において、感情理解が急速に発達することが示されている。

研究実施者はこれまで、幼児を対象に、自己感情と他者感情を区別した上で、他者の感情は「わからない」という反応が見られるのかを検討してきた。具体的には、人によって異なる感情が生起するような「あいまいな場面」(例:カブトムシが出てきた時どんな気持ちになるか)を子どもに提示し、その場面で「自分」と「他者」がどのような感情になるかを推測する課題を行ってきた。現在までに得られている知見としては、以下の4点が挙げられる。

- 【1】4歳ごろから、答えられない質問に「わからない」という反応を示す
- 【2】5歳ごろから、自己と他者の感情を明確に区別する
- 【3】6歳ごろから、「他者の感情はわからない」反応が見られ出す
- 【4】6歳ごろから、他者情報の不確実性を認識する

ただしこれまでの研究では、「他者」と「自己」の感情理解プロセスはお互いに関連しないもの、かつ「自己」の感情は「わかる」ものと前提視していた。しかし、自己感情が意識化されるほど他者感情(およびその不確実性)が意識化されることや、自己感情が「わからない」ようになる事態は、理論的にも体験的にもあり得る現象である。したがって、感情理解における「わからない」反応を、「他者」にのみ焦点を当てるのではなく、「自己」の感情理解プロセスと関連させて検討することが必要となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、「自己」の感情理解プロセスに関連した幼児期の「わからない」反応の発達の变化を検討することを目的としていた。具体的には、以下の2つの研究を行う予定であった。

**【研究1】** 自己感情が「わかる」ことが認識されるほど、他者感情が「わからない」ようになる現象の存在を確かめる。

**【研究2】** 自己に関する情報が不十分な場合に、自己感情を「わからない」と回答する年齢時期を明らかにする。

ただし本研究では、以下の理由により、当初予定していた研究から方向性を変更した。第一に、幼児期の子どもが示す「わからない」反応の実態をまず確認する必要性が生じたことである。具体的には、「わからない」反応が必ずしも年齢とともに増加するわけではない現象が確認されたこと、言い換えると、年齢が上がるにつれて「わからない」と言わなくなる現象が確認されたことから、「わからない」反応の背後にある認知プロセスを検討する研究を実施した。

第二に、他者感情推測における「わからない」反応が十分に出現する時期の検討を行う必要性が生じたことである。幼児期における他者感情推測における「わからない」反応の出現はまれであり、これがどの年齢層になると十分出現するようになるのか、およびどの年齢層になると自己と他者の条件差が十分見られるようになるのか、を確かめることが必要であった。そこで、当初のテーマを年齢層を上にして、想定した現象が見られるかを検証した。具体的には、大学生年齢

を対象に、自己と他者を区別した上で感情推測を行う課題を実施し、条件差について検討した。

### 3. 研究の方法

#### 研究1：幼児期における「わからない」と言わない認知プロセス

対象者：幼児期（3歳～6歳）の子どもを対象に、一対一で実験を行った。

手続き：ゲーム形式の課題（例、赤いコップと青いコップのどちらかに犬の人形を隠しどちらに隠れたかを答える、動物の名前を答える）を実施した。その際、質問をクローズド形式（例、どっち？）で尋ねるものと、オープン形式（例、何？）で尋ねるものの2つを設定した。また、子どもが何か回答したり「わからない」と回答した場合、その回答の理由を尋ねた。加えて、子どもの回答がそれでよいのかと確認する質問を行った。

#### 研究2-1：成人における自己感情と他者感情の「わからない」反応の違い

対象者：20歳ごろの大学生を対象に、質問紙調査を行った。

手続き：生起する感情が一義的に決まる「非あいまい」状況（例、宝くじが当たる、買ったばかりの電化製品が壊れる）と、個々人によって異なる「あいまい」状況（例、人前で発表する、カブトムシを見つける）をリスト化した。それぞれの状況において、自分ならどのような感情になるか、（一般的な）他者ならどのような感情になるか、を「とてもいやだ」「ややいやだ」「わからない」「ややうれしい」「とてもうれしい」の選択肢から回答してもらった。

#### 研究2-2：成人における自己感情と他者感情の「わからない」反応の認知プロセス

対象者：20歳ごろの大学生を対象に、実験を行った。

手続き：パソコン画面上で、研究2-1で使用した状況リストを提示し、それぞれ自分ならどのような感情になるか（自己条件）、一般的な他者ならどのような感情になるか（他者条件）を「ポジティブ」「ネガティブ」「わからない」の選択肢の中から推測してもらった。その際、感情推測に要する反応時間と脳波を測定するとともに、「わからない」と答えた理由について尋ねた。

### 4. 研究成果

#### 研究1の成果

研究1の結果より、幼児は3～6歳にかけてクローズド質問では「わからない」反応が低下するものの、オープン質問では低下しないことが示された。また、クローズド質問において、答えられない質問に対して何らかの回答をした理由について、5-6歳段階では答えを推測したことを自覚するような回答をすることが示された。加えて、クローズド質問において、答えられない質問に対して何らかの回答をした場合、その回答でよいのかを確認した際、5-6歳の子どもは回答を変更したり、答えは推測したものであると言及する傾向が見られた（ただしここに年齢差は見出されなかった）。

この結果は、幼児期の「わからない」反応の低下は、「わからないことがわからなくなる」ためではないこと（オープン質問ではどの年齢段階でも同程度に「わからない」反応をしているため）、むしろ「自分は答えを推測する」ということが自覚できる認知能力を獲得することが「わからない」反応を抑制する可能性があること、を示唆している。言い換えると、「わからない」反応の生起プロセスには、「無知の知の自覚」だけではなく、「無知の知の自覚」を前提とした「推測の自覚」が関わっている可能性が見出された。この研究知見は、日本発達心理学会第31回大会にて発表され、教育心理学研究第70巻第1号に掲載された。

## 研究2(2-1・2-2)の成果

研究2-1の結果より、20歳ごろの年齢段階では、「あいまい」状況においては自己条件よりも他者条件のほうが「わからない」反応が多くなること（「非あいまい」状況では自己と他者の違いはないこと）が示された。加えて、自己感情を先に推測させる条件のほうが他者感情を先に推測させる条件よりも、「あいまい」状況での「わからない」反応が多く生起していた。このことより、成人期（20歳頃）には、自己と他者が認知的に区別されたがゆえに、他者の感情について「わからない」反応が生じることが確認された。また、質問紙調査レベルではあるが、自己の感情を先に推測することで自己と他者の違いがより意識され、他者の不確実性認識が向上するという仮説が一部支持された。この研究知見は、British Psychology Society Cognitive Psychology Section & Developmental Section Joint Conference 2019にて発表され、富山大学人間発達科学部紀要第14巻第1号に掲載された。

研究2-2の結果より、20歳ごろの年齢段階では、「あいまい」状況においては自己条件よりも他者条件のほうが「わからない」反応が多くなることが示され、質問紙調査を用いた研究2-1の知見が実験手続き上も再現された。

また、他者条件では「非あいまい」状況よりも「あいまい」状況のほうが感情推測までの反応時間が長かった。この結果は、「わからない」反応（あるいはそれを生み出しうる状況下での感情推測）には認知的負荷がより多くかかっていることを示唆していた（ただし脳波の結果からはこれを強く支持する知見は得られなかった）。

さらに、なぜ感情が「わからない」のかの理由について、他者条件では「個人的な情報の不足」が言及されていたが、自己条件ではそのような理由は言及されていなかった。この結果は、同じ「わからない」反応でも自己と他者ではその主観的意味が異なることを示していると思われる。この知見は、日本発達心理学会第32回大会にて発表され、現在論文を投稿中である。

## まとめ

一連の研究知見の成果をまとめると、(1) 幼児期の「わからない」反応の発達プロセスの実態とその背後にある認知プロセスについて一定の法則性を見いだしたこと、(2) 20歳ごろの成人においては自己と他者が明確に区別されたからこそ「他者感情はわからない」という反応が生じることが挙げられた。

この成果は、ある行動の低下現象に発達の意味を見いだすという認知発達領域の研究におけるインパクトと、他者感情が「わかる」ことを軸に検討が進められてきた「共感」あるいは「心の理解」領域の研究におけるインパクトが見出せる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>KONDO Tatsuaki & SHIRAI Mariko   | 4. 巻<br>14         |
| 2. 論文標題<br>“Don't Know” responses in young adults' inferences about the emotions of self and others in equivocal versus unequivocal emotional situations | 5. 発行年<br>2019年    |
| 3. 雑誌名<br>富山大学人間発達科学部紀要  | 6. 最初と最後の頁<br>1-10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15099/00019730   | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-          |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>Kondo Tatsuaki   | 4. 巻<br>70         |
| 2. 論文標題<br>Why Do Young Children Not Answer “I Don't Know”? Question Format, Explanations, and Confirmation of Their Answers | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>The Japanese Journal of Educational Psychology   | 6. 最初と最後の頁<br>1~18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.5926/jjep.70.1   | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>近藤龍彰・白井真理子                              |
| 2. 発表標題<br>他者感情理解における「わからない」反応の認知プロセス：反応潜時、脳波、理由付け |
| 3. 学会等名<br>日本発達心理学会第32回大会                          |
| 4. 発表年<br>2021年                                    |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>近藤龍彰                                       |
| 2. 発表標題<br>幼児期における「わからないと言わない」発達の変化 クローズド質問とオープン質問の比較 |
| 3. 学会等名<br>第31回日本発達心理学会                               |
| 4. 発表年<br>2020年                                       |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>KONDO Tatsuaki & SHIRAI Mariko  |
| 2. 発表標題<br>"Don't know" responses in young adult's inferences about the emotions of self and others in equivocal versus unequivocal emotional situations |
| 3. 学会等名<br>The British Psychology Society Cognitive Psychology Section & Developmental Psychology Section Joint Conference 2019 (国際学会)                   |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>近藤龍彰・白井真理子                                   |
| 2. 発表標題<br>成人は「他者の感情はわからない」ことがわかるのか？：自己 - 他者感情理解の比較を通して |
| 3. 学会等名<br>日本発達心理学会第30回大会                               |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>KONDO Tatsuaki   |
| 2. 発表標題<br>The decreasing process of "don't know" response in young children                  |
| 3. 学会等名<br>The British Psychology Society Developmental Section Annual Conference 2018 (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2018年   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|                           |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|